

み ん な の 文 芸

中田 國太郎 選 投稿数13首

智恵子抄演じる人形菊纏ひ薫りの中に愛の日々見る  
 (評) 「智恵子抄」は、詩人で彫刻家の高村光太郎と長沼智恵子との愛の賛歌から生まれた詩集である。二人は、大正三年に結婚し、愛を貫いたが、紆余曲折があった。その一生を「愛の日々」と集約し、菊人形の芳香の中に感じとった作者の感性に感心した。かつて、福島県二本松町の近在の智恵子の生家を訪ねたことがあった。清酒「花霞」をつくる風格のある酒屋だった。近くの紅葉の映える丘に登ると、阿多多羅山が、青く澄み徹る空に見えた。智恵子が愛した故郷の「青い空」だった。金子作の「五本の指は」の結句よし。葱苗の透間に生えし小草とる我だけの農具五本の指は  
 亡き姑の慈愛あふれる微笑は心に生きて吾が道しるべ  
 核実験その国にも家族あり平和の続く家庭でありたい  
 日めくりの暦が急かす裁ち縫ひの夜を昼に継ぐ吾がたつきかな  
 木造の母校に学ぶ夢の覚む秋の朝に心の清し  
 峰一つ越えて隣も村祭り花火も聞こゆ朝霧の中  
 十九人集いて語る亡き夫の思い出楽し十三回忌  
 庭々にシンボル如き菊満ちぬ小菊あふれて風匂ひひたつ  
 直売所に購う芋で手作りのこんにやく味よく煮えて客待つ  
 坂道に余りに多く積りたる枯木を拾い掃き掃き登る  
 秋祭り神楽の笛と太鼓鳴りほろ酔い増せし心踊りぬ  
 轟音と竜勢空に上りつめパラに吊られて鮮かに舞う

皆野 金子善次郎  
 皆野 新井 愛子  
 皆野 新井 茂  
 皆野 笠原三江子  
 三沢 新井 叶子  
 上日野沢 四方田利男  
 皆野 吉岡 ヨシ  
 金崎 山田 雅子  
 三沢 真下 杏子  
 皆野 塩田 千代  
 野巻 町田 忠次  
 林 武義

引間 豊作 選 投稿数23句

蜘蛛の巣を壊して問いぬ明日の糧  
 (評) 奇想天外と言えは大袈裟だが、この句の向う側に秘められているのは、自然の生態を慈しむ作者の優しさと、何事も見逃すまいとする眼指しを、常に諸行にむけていればこそ時折こうした素晴らしい貴重な句を授かるのだと思う。蜘蛛が巣を張るのは大概午後で、虫の盛に飛ぶ夕刻までに仕上げようと、懸命に活動中庭木に鉢でも入れようとした作者が、折角の巣を駄目にしてしまった。これから掛け直しでは明朝の餌に間に合うかどうか、つい思遣りの言が、「免ね」と口を衝いて出た瞬間を句に仕立てた感性に共鳴。  
 追憶も路も干草に始まりし  
 下田野 中田 久恵  
 下田野 中田 久恵  
 皆野 松本 節子  
 皆野 松本 節子  
 人形にいのち入れゆく菊師の手  
 三沢 新井 民子  
 三沢 新井 民子  
 咲き誇る休耕田の秋桜  
 下日野沢 佐藤 清子  
 下日野沢 佐藤 清子  
 足病みし友の快方秋日和  
 三沢 石森 勝子  
 三沢 石森 勝子  
 眼うらに残る薄やけもの道  
 下日野沢 高山 ユウ  
 下日野沢 高山 ユウ  
 菊の鉢玄関先に並べ置く  
 下田野 根岸 進  
 下田野 根岸 進  
 小急ぎに買物をする秋隣  
 金崎 浅見富美子  
 金崎 浅見富美子  
 無二の友を連れ十月の逝きにけり  
 三沢 真下 杏子  
 三沢 真下 杏子  
 栗飯に好きな青豆母の味  
 下日野沢 植木 豊子  
 下日野沢 植木 豊子  
 着水の川さかのぼる鴨の群  
 三沢 長谷河ソノ  
 三沢 長谷河ソノ  
 ささら波光る川面に冴える風  
 国神 松岡 千恵  
 国神 松岡 千恵

俳句・短歌を募集  
 作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して  
 企画課へお寄せください。  
 1人1句、1首に限ります。  
 8日必着

町民作品展示コーナー

役場ロビーで、町民の皆さんによる写真や絵画、俳句などの作品を展示しています。  
 ご来庁の際には、ぜひご覧ください。

